

ハンセン病 知り伝える

福岡・小竹の私設資料室

福岡県小竹町にハンセン病を伝える私設資料室がある。NPO法人「ちくほつ共学舎 虫の家」事務局長の高石伸人さん(71)が国立療養所の入所者夫婦との出合いをきっかけに、13年前、開設した。夫婦のうち夫は昨年88歳で亡くなり、元患者への隔離政策を違えた熊本地裁判決から今月で20年が過ぎる。入所者の高齢化が進む中、啓発活動を続けてい

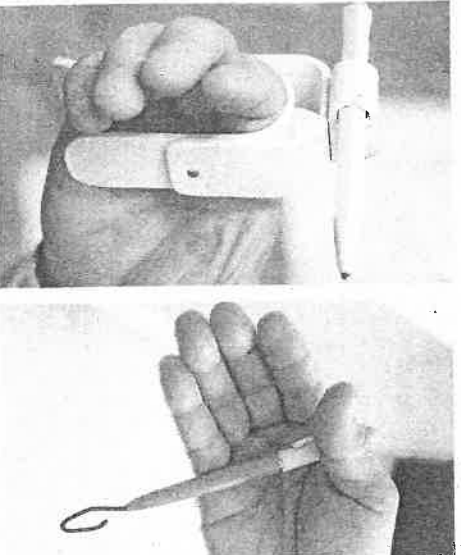


入所者から譲り受け、生活道具や全国の療養所の写真が飾られる室内で、「ハンセン病問題に触れてほしい」と語る高石さん(19日、福岡県小竹町で)＝浦上太介撮影

入所夫婦らの生活用具 展示

田畑が点在する住宅街に、「杉野ハンセン病資料室」がある。国立療養所・菊池恵楓園(熊本県合志市)に入所する杉野芳武さん(故人)と桂子さん(80)夫婦の協力でつくった。室内には隔離政策時代の療養所の「外出許可証」や15人が雑居した36畳の部屋にあった所持品箱、不自由な手でも持てるように取っ手をつけた筆記具など約250点が並ぶ。高石さんが撮影した各地の療養所の写真も壁に飾られている。

入所者が使用していた、**①**手作りの筆記具、**②**ペンを改造しため手作りのポタツン止め



社会福祉協議会の職員が見・差別が強い当時、元患者数は13年の120人から昨年は280人に。小竹町内にある四つの小中学校は今年度、高石さんから学んだ成果を冊子にまとめ、秋にも人權学習でハンセン病夫婦はつらい体験を語ってくれた。「中絶を強いら

った高石さんは1986年に、自宅敷地内に障害者3人の居場所となる「虫の家」をつくった。その後、少しずつきは地域の中で杉野さん(杉野さんは自身の名を冠した施設に戸惑いつつも喜んで展示用に生活道具を譲ってくれた。2008年4月、虫の家の喫茶スペースが改装されてきた資料室に他の入所者の寄贈品とともに飾られた。13年間で来訪者は834人。各地から教職員や学生が訪れ、夫婦を招き講演会も行われた。帰郷をためらっていた杉野さんだったが、10年には故郷の熊本県内での講演が実現した。高石さんも講演を続け、参加者数は13年の120人から昨年は280人に。小竹町内にある四つの小中学校は今年度、高石さんから学んだ成果を冊子にまとめ、秋にも人權学習でハンセン病夫婦はつらい体験を語ってくれた。「中絶を強いられた」「啓発でラジオ番組に出たら中傷の手紙が届いた」。杉野さんの厳しい表現に、差別の深刻さを感じた。杉野さんは「小さな町から差別根絶を発信してくれるのはありがたい」と感謝の言葉を述べ、高石さんは「杉野さん巡った高石さんが思っているのが資料室開設だった」。

「(国民)一体で患者を隔離話している。別根絶を訴え続けたい」と